

〔選書に際して〕

書き言葉の可能性／限界を考察する手がかりとして再読の必要を感じた。ブランショの小説のような難解とされる書物は読書会の素材としては適していないようにも感じるが、「この世に存在しない架空の読書会」なら取り上げられるかもしれないと思った。難解な小説を難解な哲学用語に言い換えるのではなく、ひとまず素朴に読んでみたい、という動機。容易に読み終えられない書物、他人と共有しがたい読書体験に価値を置きたかった。

このレジュメは書物からの引用をメインに少しのメモを添えて構成される。

〔引用とメモ〕

——小説は「彼」への接近を試みるところからはじまる。「今度は」という書き出しに注意。書き出しがすでに何かの「再開」「繰り返し」「反復」であるということ（小説を最後まで読んでまた冒頭に戻ることもできるのだが、そのとき二度目の読書体験は一度目から決定的に変質しているのだろうか？）。

「私はどうあっても彼から、前へ進むための誘いと、それからたぶん危険と障害とを待ち望んでいたのだと思う。」（9 頁）

「しかしある日、私は自分の書くものがつねにますます彼にかかわるものになっていること、そして、それが目的としているのは、間接的なかたちではあれ、彼をそこに反映させようとする目的以外にはありえないように見えるということに気づいた。〔……〕「私は」と語る必要性がこの反映と私との関係をもっとうまく制御することを可能にしてくれるかもしれない。そのことを私は知っていた。いや、正確にそれを知っていたというわけではなく、私はそう期待していたのだ。」（11～12 頁）

「彼は私を、ある務めにつかせていたのだが、その務めのまわりに彼は空白をつくりだしていたのであり、そして、この空白を制限し封じ込めることが、その務めには可能であるはずだと私に信じこませていたのである。じじつ状況はまさしくこのようなものだった。少なくとも見かけのうえでは。この間、私は非常につらい出来事をいくつか横断しなければならなかった。あるいはむしろ、それらの出来事のほうが私を横断したのであり、いまもなおたえず横断しつつあると言ったほうがいいのかもかもしれないが、それでも私はある奇妙な幻想を享受したのであり、その幻想のおかげで私はもはや務めなどと言うのではなく生と言うべきだということに気づかずにいられたのである。」（14 頁）

——この小説では、徹頭徹尾「書く」という営みの可能性／限界をめぐる語りが追求されているように見える。「書く」ことそのもの、あるいは「書く」ことの周辺をめぐる語りは、否定され、語尾を摩滅され、何度も言いなおされながらヴァリエントを生成していく。語りは再帰的であったり渦中の的であったりす

るが、どんなに連れられてもその圏域を閉じることがない。終わりなき彷徨がつづく。

「彼は私の道の同伴者になっていたのだが、それでも私たちがすべてを共有していたなどと私には言うことはできない。あるいは、そのときこの共同性が意味していたのは、もしかしたら、彼は私とすべてを共有していたが、私のほうが彼と何も共有していなかったということなのかもしれない。じっさいには、明らかに私たちは二人とも何も持たぬようにしようところが出ていたはずなのだが。」(20～21 頁)

——「同伴者」という言葉の最初の登場。このあとに続けて「私たちが共同なものとして航海しているこの領域」(23 頁)という言い回しが出てくる。

「私が出会いに言及するとき、私はこの「すべてはすでに語られた」に言及しているにすぎなかった。この「すべてはすでに語られた」こそが出会いの真実だったのである。出会いがずっと前に起こったのか、あるいはそれほど前のことではないのか、さらにまた、出会いは「そのとき」、つまり未来を巻き添えにしてしまったそのときに起こったのか、こうしたことはまったくどうでもよいことだった。」(38 頁)

——40 頁あたりから、「私」は「彼」に「家」がどんなふうであるか描写するように誘われる（負荷をかけられる）。「私にはできません」という不能の表明に対し、「私たち二人でなら、できるかもしれません」と返す声、そして沈黙（沈黙による応答）。

「私は部屋を見つめたが、それはかなり遠くに広がっているように思えた。私には部屋の境界がはっきりとは見えなかったのだ。むしろ私は空間を思い出していたのである。ちょうど私自身のことを思い出していたのと同じように。私は立ち上がって、一杯の水をもとめて台所へ向かった。だが、ドアをまちがえてしまったのだろう。私が下のほうに目にしたのは、照明の暗い散らかった部屋だったのであり、そこに降りていく力が私にはなかった（たぶん、それは貯蔵室だった）。」(42 頁)

——この小説は空間についての語りが重要。空間についての語りはなぜか「想起」とともにある。「思い出す」という再帰的な行為が「空間」を現前させる端緒となる（再帰と想起）。しかし「下のほう」にある部屋については、「私」が「降りていく力」を欠乏させているために、描写すら不可能。冥界下りを連想させる。「(たぶん、それは貯蔵室だった)。」「というパーレンで閉じられた記述は、真っ暗闇のなかに沈んだ声となって、不可視の空間に響く。

「すべては異常なまでに静かだった。ガラスのはめられた大きな窓をとおして眺めると——窓は三枚あった——、向こうのほうに誰かが立っているのが見えた。私がある人に気づくと、ただちにその人はガラスのほうに向き直り、そして、私に目を止めることなく、部屋の広がりすべての奥行きを、激しいけれども、すばやい視線で凝視した。おそらく私は部屋の真ん中にいたはずだ。私には外にあるはずの庭がはっきりと見えなかったが、その庭を、私は強大な力を持ちいて思い出しつつあった。その力は欲望に似ていたのである。」(43 頁)

「すべては異常なまでに静かだった。大きな窓のほうを眺めると——窓は三枚あった——、向こうのほうに誰かが立っているのが見えた。私がある人に気づくと、ただちにその人はガラスのほうに向き直り、そして、私に目を止めることなく、激しく、部屋の広がりすべてと奥行きを凝視した。私はまだテーブルの近くにいたので、いそいで振り向いてこの形象（フィギュール）と直面したいと望んだ。だが、驚いたことに私はいまやガラスのすぐ間近にいて、それでいてあいかわらず部屋の真ん中にいると感じているのだった。そのため、私はある一点のほうを奇妙な仕方で見つめるように強いられることになったのである。」（46 頁）

——43 頁（A）と 46 頁（A'）で類似したふたつの場面が反復される（語りなおされる）。（A'）が（A）を消去する、とも言える。少し前に似たような場面があった……と振り返ると、雪原の足跡のごとくさっきまであった痕跡がもう消えている、というふうに、読みの感触はいつも曖昧模糊としている。

「動かないでください。誰かがいると思います」——「誰かが？　ここに？」——「誰かがガラスごしに私たちを見えています」——「ガラスごしに？」こうした言葉はただちに、私に恐怖や恐れ、感情を引き起こした。まるでガラスの空虚がそこに反映されているかのような感覚だった。まるでこうしたすべてがかつてすでに起こっていたのであり、それがまたふたたび、またふたたび起こっているかのような感覚だった。私は叫び声をあげたと思う。」（47 頁）

——「誰かがガラスごしに私たちを見えています」という声は見たものをそのまま描写する報告の声というよりは、現在時制から少し先にズレた半歩先を指し示す遂行的な声に感じられる。この声がガラスごしに私たちを見る誰かを現出せしめる、というように。ブランショ「死の宣告」（1948）における電話ごしの「J が死にます」（191 頁）という声に似た感触がある。このような声は突き当たりがなく底なしで、発話と同時に話されたことの内容が多重露光の像になる。

「ある至高な出来事がここで起きた。そして私にとって生きることは、永遠にここにいつづけることであると同時に、ただこの周囲のみを回りつづけることなのだ、と。そのように回ること、それは絶えざる旅立ちのようなものであり、そこには発見は欠けていたけれども、この旅立ちが私自身に従属したものであり、そして、至高性に等しいものでもあった。そうだ、それは最高度の生だったのだ。たとえこの生のおかげで死にいたるような静けさと孤独のなかを私はさまようのだとしても、私にはこう言うことが可能だったのである。必ず、必ずやらねばならない——私はおまえを強い力で私のほうへ惹きよせてやる、と。」（72 頁）

「それは、描写のこの瞬間に私自身を引きとどめておくことであり、是が非でもこの瞬間を空虚なままに維持すること、この瞬間を保護し、これが進行していくのを阻むことだったのだ——すなわち、かならずや起こらずにはいられぬことがらに向けて、これが進行するのを阻むことだったのである。私はかすかな身動きをした、あるいは、体の位置を変えようと試みたのだと思う。ところが私は自分の不動性に突き当たってしまった。そして、すぐさま私ははっきりとこう感じた。私のすぐそば——この近さは常軌を逸していた、というのも私の手はほとんど動かなくても、それに触れることができたはずだから——、そ

のそばにある肘掛け椅子には誰かが座っている、と。いまや私はその誰かを深く強烈に感じ取っていた。」  
(77～78 頁)

——ガラスごしの誰か、という媒介性の高い存在から一転して、「常軌を逸」するほど「近い」存在へ。距離（空間）が伸び縮みする。

「私はこの消失という出来事を、私の同伴者の言葉に直接に関連づけてみようとさえしなかった。これら二つの記しのあいだに自分がいかなる結びつきも見えていなかったなどと私は言おうとしているのではない。それどころか私はもっと深く、もっと圧倒的な連帯を予感していたのだ。それは、互いに相手を知らない二つの領界の連帯であり、おそらく互いに完全に異質であるような、時間のうちなる二つの時の連帯だった。二つの時がその共通の異質性のさなかで出会ったのである。」(86 頁)

——「同伴者」とは分身か。絶対的な他者か。小説中の対話体は詩神との駆け引きのようでもあり、独語のようでもある。

「これにたいして彼はかならずこう応えるのだった。「でも、あなたにはたっぷりと時間があります。」」  
(91 頁)

——時間がたっぷりある、とは。死の宣告よりもおそろしい。

「私は苦い思いのせいで枯渇してしまったのだと思う。私には心が欠けていた。私は数多くの格闘に耐えてきた。とても遠くまで行ったこともあった。だが、とても遠くとは、どこだったのだろうか？ そこ、このテーブルの近くのことだったのだ。私にはそのテーブルの表面が、やはり、空虚な動きの軽やかさで回転しているのが見えていたし、それから、そこにいる男が見えていた。おそらくその男は何かを書いているところだった。そして私自身はその男に抛りかかっていたのであり、その私にはまた別の誰かが、さらに、その誰かにはまた誰かが抛りかかっていたのである。この連鎖の果てにあるのは、やはりまた、この部屋であり、このテーブルだった。私にはこうした無限にたいする抛りどころなどなかったし、問いかけによって倦むことなく開かれては閉じられる空虚さに立ち向かう力もなかった。」(103 頁)

「この「私たち」は、私に強い印象を与えた。そこには新しい語調が加わっているように私には感じられた。彼は話し出す前に、私との隣接から身を引いたように私には思えたのである。彼はおのれを追放したのであり、この追放が了解の奥底と化したのだ。そしてこの奥底から、漏れ出てくる息のように言葉の生が表明されたのである。その生はすりきれ、燃え尽きてはいたが、それでもやはり奇妙なほどに生き生きとしていた。」(113 頁)

「私はこのことに衝撃を受けた。すでに一度経験したのと同じように。この語句がどれほどおのれを開いて、どれほど亀裂をあらわにしているように思えたことか。そこから痛ましい沈黙が、中性的な広がり立ち昇ってくるのだった。暇なとき時間を失いながら目的もなく足跡の上に足跡を重ねて、この広が

りを終わりなく踏破するのは心をそそることだった。」(118 頁)

「ガラスのはめられた大きな窓をとおして眺めていると——いまこの時、すべては異常なまでに静かだった——、それから、緑の葉がかたちづくるカーテンの周囲を、夢見るような不思議な日がまわっているのを見ながら、そして、その日が私の想像しえたのと同じくらいに光り輝いているのを見て、それでいてこの光がかならずしも光ではなく、光に類似したものであって、それが表面を軽やかに滑りゆきながら消え失せていくために深みをいくつも砕いてしまったという愉悦を表現しているのを見て、私は自分があのこと、すなわち、ガラスの向こう側に誰かがいたということを思い出すのを抑えられなかった。私がそのことを思い出すと、ただちに彼はガラスのほうに向き直り、そして、私に目を止めることなく、すばやく、部屋の広がり、のすべて、その奥行き、のすべてを、激しくすばやい視線で凝視した。この光景はほとんどすぐに消えた。だが印象は消えなかった。これは、不毛な同じ地点に、倦むことのない同じ地点に回帰するという恐ろしい印象だった。まるであらゆる道が私をそこへと連れもどすかのようだった。」(135 頁)

——43 頁、46 頁と類似した記述がふたたび訪れる。三度目。「窓は三枚あった」(43、46 頁) ことと関係あるだろうか。部屋はほんとうはいくつあるのか。

また、「私」はガラスの向こうの誰かを「想起」のふちでオブスキュールにしか感知できないのに、ガラスの向こうの「彼」はたった一瞥で「私」がいる部屋の奥行きまでを瞬時にかすめとることができる。この非対称性は何だろう。不均衡な視線。

「あなたは書いているのですか、あなたは書いているのですか、いまこの時？」これにたいしては、私は彼に向けてこう応えないわけにはいかなかった。「でも、わかっているでしょう、私にはもう書けません。それに、私はもうほとんど私ではないのです。」(138 頁)

——小説のちょうど中盤あたりで登場する、重要なリフレイン。この呼びかけの声はあとにも何度か反復される。

「私は彼にたずねた。「私たちは書かれたものによって結び合わされている、そうでしょう？」これに対しては、彼はただちに応えた。「ええ、そのとおりです。」ただし、彼はこの後に付け加えることによって、自分が何も忘れてはいない、何も失われてはいないのだということを私に示したのである。「でも、わかっているでしょう？ 私たちのあいだに名前があってはならないのです。」(143～144 頁)

「むしろ言葉たちのほうが、私のうちにおのれを書き込もうと欲しているのである。それはまるで、私が自分の墓のうえに読み取るのと同じように、私自身のうえに、終わりという語句を読みとることができるようにするためであるかのようだ。そして、たしかに、これらの夜の時のなかであれば、そのように自分自身を読みとることができると私は感じることもある。危険な読み方だ。私は、私をずっと超え出ていき、ついには、もはや私がそこには存在せず、誰かがそこにいるという点にいたるまで読むことになってしまうのだ。」(187 頁)

「それは夜の夢であり、その夜のなかで、ちょうど私が言葉たちのかたわらにとどまっているのと同じように、言葉たちはその夜の親密さによって私のそばにとどまっているのだが、この夜はたえず日を通していき、この夜が私にとっての日となるのである。そのなかでは、言葉たちは一面にわたって立ちあがり、起立していて、空虚で無限の円環を形づくっている。その円環こそが依然として私なのだ。たとえ、すでにそこに私は存在していないのだとしても。」(200 頁)

「あるがままとは、つまり、目のないイメージということであり、沈黙したままおのれを隠蔽する閉じた不動性ということなのだが、こうした不動性においては隠蔽そのものが開示されることになる。」(200～201 頁)

——モランディの、顔のようで顔でない不透明の器物や箱が並んだ静物画を想起させる。

「私がこの理由を理解したのは、私の知らぬまに、思いも寄らぬ道をとおって、この務めが私をあるひとつの語句へと導いたということに気づいたときだった。その語句こそ、書く、という語句だったのである。夜の円環のなかで、この語句はとつぜん、光を放つ直感のように起きあがった。まるでまったくはじめてその姿を現すとでもいうかのように。」(214 頁)

——神秘的な記述。

「私は彼に行った。「ご存知でしょう。この顔つき(フィギュール)には微笑みが浮かんでいます。」(224 頁)

——「微笑み」という言葉の登場。

「その時、私を包みこんでいた強大な省察のなかに依然としてとどまりながら、私は自分の目が何かあるもののほうへ開かれていることに気づいた。最初それが何であるか私にはわからなかったが、それは一個の点、いや、点ではない、そうではなくて、空間全体の開花にして微笑みであったのであり、それが空間のすべてを表現し、占有していたのである。そうして私はそのなかに、かつての私が彼にたいして描写してあげたいと望んだものをまちがいなく見出した。束縛も、顔もない自由な微笑みだ。これこそが、あの不在を起点にして、そっと輝き出し、彼を照らし、彼に一個の類似を、一個の名前を、一個の沈黙した名前を与えるのだった。」(226～227 頁)

「この微笑みのうちでは、日を保護している被膜が溶けはじめていくのであり、そしてこの溶解のうちに、私によりいっそう近い光、よりいっそう人間的な光がしみこんでいくのだと言えるのかもしれない。たぶん死んでいくものはみな、たとえそれが日であっても、人間に近づいていくのであり、死ぬことの秘密を人間にたずねるのである。こうしたすべては、もうそれほど長くはつづかないだろう。」(234 頁)

〔書物を読み終えて〕

『私についてこなかった男』は段落分けが極度に少ない。章立てもなく、登場人物の固有名詞もなく、物語らしい物語もない。繰り延べられる語りとともにひたすら「私」の彷徨がつづく。なので、どこでひと区切りの呼吸を置けばよいのか不明なままに、何かに牽引されながら読み進めるかたちとなる。特別な語彙を駆使するでもなく晦渋な言い回しをするわけでもなく、こういう小説が出来てしまうという凄さ。先刻読んだばかりの言葉が消えていくように感じられるのはブランシヨの文章の最大の魅力で、このような「言葉で言葉を消す」試みに自分も挑みたいと思った。およそ読書会向きでない書物であることは間違いない（ひとりで読んだほうがいい）。結局のところ、何ひとつ読めていない、という頼りない感触ばかりが残る。至高の読書体験となった。いつかまた読む。

〔モーリス・ブランシヨ略歴〕

1907 年 9 月 22 日フランス中東部ソーヌ・エ・ロワール県生まれ。ストラスブール大学卒業後、パリで右派の新聞・雑誌に時評を寄稿するジャーナリストとして出発。政治・文芸時評と並行して『謎の男トマ』（1941 年）、『死の宣告』（1948 年）などの小説を執筆。『文学空間』（1955 年）、『来るべき書物』（1959 年）、『終わりなき対話』（1969 年）、『明かしえぬ共同体』（1983 年）など数々の著作を残した。生前、自身の肖像写真を一度も公開しなかったことから「顔のない作家」と呼ばれる。2003 年没。

〔書誌について〕

モーリス・ブランシヨ『私についてこなかった男』は谷口博史の訳によって書肆心水より 2005 年に刊行された（※原著は 1953 年刊行）。